ポーセレン・ラミネートベニアによる審美修復の経過観察

安田 俊治

A Prognosis of Esthetic Restoration with Porcelain Laminate Veneers

Shunji Yasuda

I. 症例の概要

ポーセレン・ラミネートベニア修復は、審美的補綴装置のなかでも歯質削除量が最少で、変色歯をはじめとする多くの適応症を有することから日常臨床に広く普及している¹⁾。しかし、修復物の維持のすべてを接着に頼っていることから、その予後に不安を抱きながら行ってきたのが現状である。今回、長期的に良好な経過を観察できた症例を、装着後に生じた問題も含めて報告した。

患者は17歳（初診時）女性。上下顎前歯の変色による審美障害を主訴として平成2年3月29日、大阪歯科大学附属病院に来院した。当時、某歯科医院にて1|1にコンポジットレジン直接築盛法によるベニア修復が行われていたが、審美性の改善には至らなかった。上下顎前歯の切端側2/3には、幼年期に服用した薬剤が原因と思われる変色が認められた。 $\frac{3}{3}+\frac{3}{3}$ は、健全生活歯で歯列不正なども認められず、動揺度も正常である。 $\overline{6}$ に全部鑄造冠が装着されているが臼歯部での咬合支持は確実で、ブラキシズム、異常習癖および顎機能異常も認められなかった。また

図1 Intraoral view
初診時の口腔内所見

スマイルラインの観察を行ったところ、上顎前歯のみならず下顎前歯の露出も認められた（図1）。

II. 診断と治療方針

診断：上下顎前歯の変色による審美障害。

治療方針：口腔衛生指導後、 $\frac{3}{3}+\frac{3}{3}$ に、耐火模型法によるポーセレン・ラミネートベニアにて審美修復を行うことにした。

III. 治療内容

治療に先立ち、本法の特徴を患者に対して十分説明し理解を得た。ポーセレン・ラミネートベニア修復の禁忌症であるブラキシズムや異常習癖などが存在しないか問診し、以下に示す手順で上顎前歯から治療を行い、平成2年7月9日に下顎前歯の装着を行った（図2）。

シェード・テイキング：支台歯形成の前後に行った。

支台歯形成：下顎においては、対合歯とのクリアラスが均一となるよう形成し、偏心運動時、特定の歯に咬合力が集中しないよう注意した。上下顎とも切端被覆型とし、マージンの設定位置は歯肉縁とした。

印象採得：付加型シリコーン印象材を使用。

図2 Completed porcelain laminate veneers
ポーセレン・ラミネートベニア装着

ポーセレン・シェルの製作：耐火模型法により製作。

試適：ポーセレン・シェルの適合性の確認と低粘度コンポジットレジンセメントの色調を選択するために、試適を行った。

接着：歯質の被着面処理としてリン酸を用いてエナメルエッチングを行い、ポーセレン・シェル内面の処理は5%フッ酸によるエッチングを行ったのちシランカップリング剤を塗布した。光重合型コンポジットレジンセメントを用いて接着を行った。

本症例は、コスモテック・システム（ジーシー社製）を使用した。

IV. 経過観察と考察

治療終了後、定期的なリコールを行い、咬合接触状態、歯肉の状態、う蝕の発生、破折ならびに剥離の有無について観察を行った。約2年後、112にう蝕による急性化膿性

図3 Cementing of porcelain-fused-to-metal crowns on 112 (2 years after treatment)
112に陶材焼付鑄造冠を装着（装着後約2年）

歯髄炎を発症したため、根管治療後、支台築造を行ったのち、112を陶材焼付鑄造冠に変更した（図3）。その後、1に装着された陶材焼付鑄造冠の切端に一部分破折が認められたため、同部の研磨を行った。なお、同部位以外の上下顎に装着されたポーセレン・ラミネートベニアには問題は生じず、8年経過した現在まで経過は良好である。また、X線診査からも特に異常は認められない（図4）。

本症例のように偏心運動時のガイドに関与する歯にポーセレン・ラミネートベニアを装着した場合、経時的に生じる歯の咬耗にポーセレンの摩耗度が追従できないことが原因となって、ポーセレン・シェルの剥離が起こるといわれている²⁾。よって、装着後に定期的な咬合診査および調整を行った。また、装着後に破折あるいは剥離が生じた他の症例の多くは、叢生を有する歯列であったことから、今回、下顎前歯に行われたポーセレン・ラミネートベニアが長期的に良好な経過を示しているのは、叢生などの歯列不正が存在しなかったことが大きく関係しているのではないかと考えられた。また、装着後約2年で、う蝕による急性化膿性歯髄炎が発症したのは、接着操作が原因となったとも考えられる。

ポーセレン・ラミネートベニアを用いた審美修復の良好な経過をより長期的に維持するためには、術前診査による適応症の選択と、適切な術式、さらに装着後に定期的な経過観察を行うことが、非常に重要であることがわかった。

文 献

- 1) 横塚繁雄, 高橋英登, 三善由高. カラーアトラス ポーセレン・ラミネート・ベニア・テクニック 14-15, 東京: 医歯薬出版, 1993.
- 2) 高橋英登. ここまで広がったポーセレン・ラミネートベニアの適応症. 補綴臨床 26: 429-444, 1993.

図4 Intraoral view and dental radiograph of lower anterior teeth (8 years after treatment)
装着後約8年の口腔内所見および下顎前歯のX線写真